

# 柳生連也と秦光代

当代一の剣術家が求めた日本刀とは

平山直弥



資料1 柳生連也厳包 ②

一の剣術家が求めた理想の日本刀とはどのようなものなのか、実物を交えてこれを検証していきたい。  
なお、文中の丸囲み数字は、文末の「引用・参考文献」を示します。

## 一、柳生連也

柳生連也とは何者なのか、まずはそこから説明していこう(資料2)。  
寛永二年(1625)、尾張徳川家剣術指南役柳生兵庫助利厳の三男として尾張名古屋の地に誕生、幼名は島新六という。

連也の母は、関ヶ原の合戦に西軍として参戦し奮戦の末散った島清興(左近)の娘であり、当初は島家の再興を期待されこの名をつけられたと言われている。後に柳生七郎兵衛兵助、兵庫と改名、実名は厳知、後に厳包とする。

五歳の時に姉の嫁ぎ先である三州・御油宿(愛知県豊川市御油町)の問屋、林五郎右衛門に預けられ、九歳のときに名古屋に帰り家伝の兵法を学び始めた。その後、成長とともに剣術の腕前を上げ、慶安二年(1649)に隠居した父

に柳生但馬守宗矩が登場したことも話題となった。

柳生宗厳(石舟斎)から始まる剣聖柳生の系譜において連也は特別な存在である。戦国時代に生まれた柳生新陰流の剣術を進化発展させるだけでなく、文化人としての側面も持つ。

尾張という地において絶大な影響力を誇った彼が日本刀にこだわらないはずがなく、尾張刀工の秦光代(みつよ)をお抱え工として厳しい注文の下、多くの刀を打たせたとともに柳生鐔、柳生拵を考案したと伝わっている。

時代の変遷とともに姿を変えた日本刀、当代

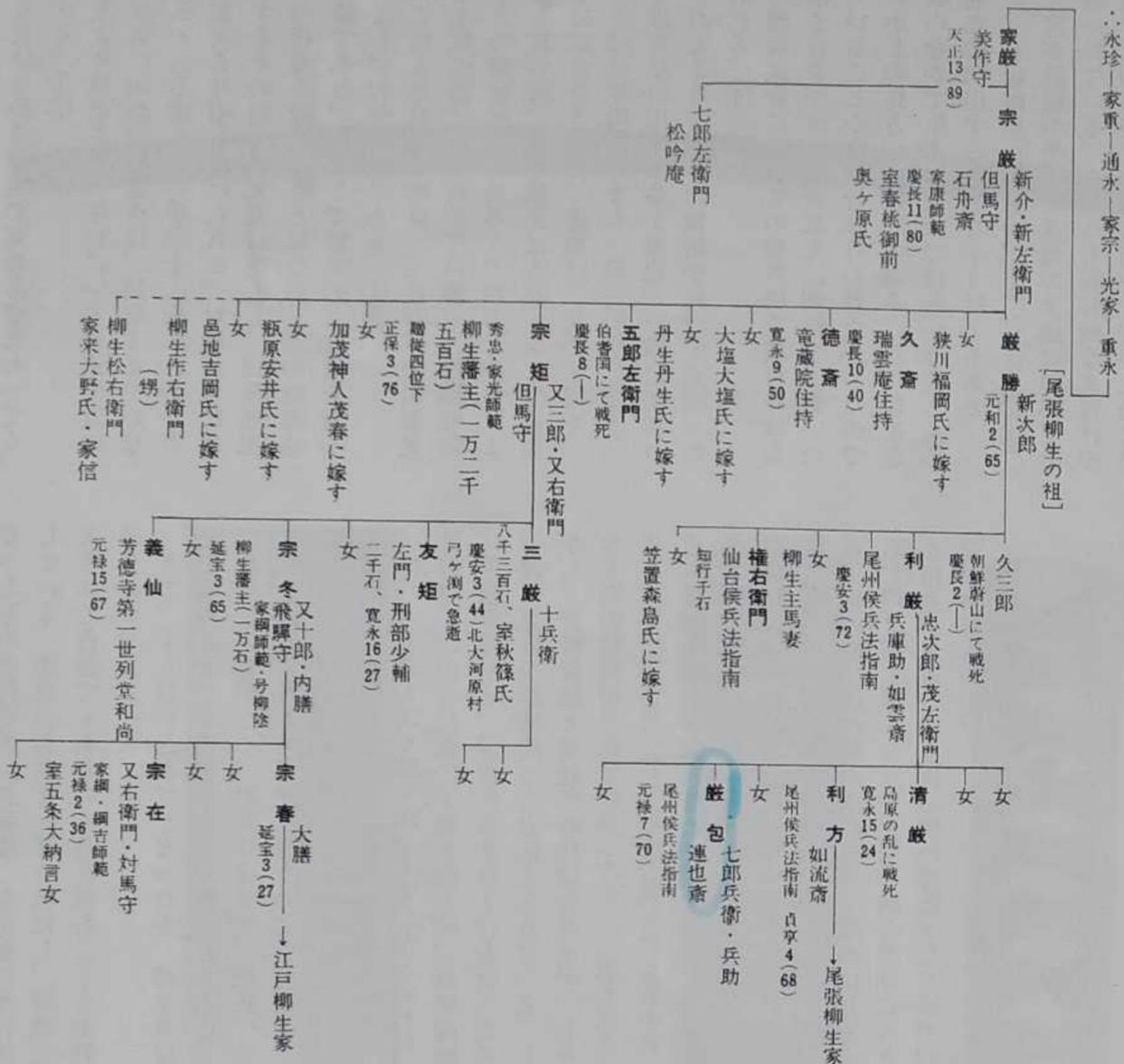
## はじめに

幼少期、祖父が日本刀を持っていたことを臆気ながら覚えていたらしいが日本刀との接点が多かった自分が、ふとした縁から柄巻の道を志すことになった。そして、初めて手に入れた日本刀が尾張拵のついた政常の脇差であったことから、尾張の刀、刀装に興味を持ち、郷土ゆかりの様々な品を求めるようになり、本稿を執筆するに至った。

太閤豊臣秀吉殿下の生まれ故郷である愛知県名古屋市中村区に生を受け、尾州刀工政常の眠る西光院の近くで青春時代を送った自分にとつて、今の状況には何か運命的なものを感じずにはいられない。これまでのすべてに感謝しつつ、いま必死になって文字を書き起こしている。

柳生連也(資料1)は尾張徳川家の剣術指南役を務めた人物である。連也のことは知らなくても、柳生新陰流という言葉はどこかで聞いたことがある人も多いのではないだろうか。過去より多くの媒体に柳生新陰流という剣術は登場しており、最近では某有名アプリゲーム

資料2 柳生家家系図 ③



如雲斎(柳生兵庫助利厳の隠居後の号)より一切の相伝免許を受けて柳生新陰流の道統を継ぎ、兄である柳生茂左衛門利方の推薦により、後の尾張徳川家二代目藩主 徳川光友の剣術指南役となる。

慶安三年に父如雲斎が亡くなり、父の隠居料三百石を増加、後にさらに増加され六百石を拝領した。慶安四年に兄利方とともに、病に伏せていた三代將軍徳川家光に剣術を披露し、家光より高い評価を受ける。

寛文八年(1668)、四十四歳の時に隠居を願ひ出るが許されず、六百石を返上して御蔵米二百石を拝領する。

貞享二年(1685)、隠居を許され剃髪し、浦連也と改名した。隠居後は造園や茶を好み、瀬戸物の茶器を焼かせるなどした。修業の妨げになるとの理由から女性を遠ざけ生涯独身を貫いた連也に子はなく、元禄七年(1694)に兄利方の子厳延を養子として柳生新陰流の道統を継承させたが同年に死去。遺言によって遺体は火葬され、遺骨は熱田沖の海上へ散骨された。法号は寒松院貞操連也居士。①②

連也には数多くの逸話が残されている。剣術を始めた幼少の折、稽古が終わった後に人を集め、銭を持ち出して「自分を叩いた者には褒美をとらせるぞ」といって毎晩多人数を相手に稽古を行っていた。強く叩かれた時は自分で帯を締めることができず母に頼んで締めてもらうこともあり、母は「これでこそ上手にはならぬぞ」といって涙を流したという。幼いながらも

強くなりたいたいという連也の気持ちも伝わってくる話である。①②

兄利方より推薦され、江戸にいる徳川光友のもとへ指導に向かった連也は、到着するやいなや柳生流・一刀流の遣い手三十人余りとの手合を光友より申し付けられる。対戦相手に悉く勝利するその腕前に光友は感心し、以後連也は剣術の指導を受けることになる。この時連也は十八歳であり、若くして驚異的な技量を持っていたことがわかる話である。①②

そして何より有名なのは、三代將軍徳川家光の剣術上覧の際に行われた江戸柳生 柳生飛騨守宗冬との御前試合であろう。利方と連也による剣術上覧の後、將軍家光は人払いをして連也と宗冬に試合をさせた。連也は二尺の木刀を、宗冬は三尺三寸の太刀をとった。試合が始まり、太刀を以て払い出す宗冬を連也が一撃にて切り落としたところ、宗冬の親指が砕けて血走ったと言われる。④

この御前試合についての資料的な裏付けはなく、宗冬自身が後日將軍家光に剣術を上覧いただいていることから試合は行われなかったのではないかとの見方が一般的である。江戸柳生との確執のなかで生まれた話ではという説もあるが、連也の突出する強さを示す話でもある。また、五味康祐氏の時代小説「柳生連也斎」では、宮本武蔵の弟子と連也の決闘についての話が描かれている。こちらも資料的な裏付けがない話ではあるが、宮本武蔵が仕官のために尾張に來訪したことは事実であり、仕官は叶わな

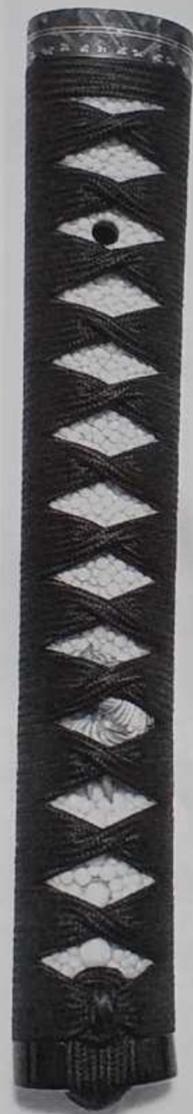
かったものの円明流(武蔵流)を尾張の地に残している。連也の名前を一躍有名にし、映画化もされた作品でもあるので是非読むことをお勧めしたい。⑤

さて、少し話が逸れてしまったが、柳生新陰流を極めんとした連也が自らの使う日本刀にこだわらない筈がなく、対馬守橋常光、肥後守秦光代をはじめ多くの刀匠に自身の刀を打たせ、特に肥後守秦光代を好み、自らの抱え工にして多くの業物を打たせたと伝わっている。

鐔への造詣も深く柳生鐔を考案したといわれ、尾張鐔工の山吉兵衛に下地を作らせ、狩野探幽に下絵を描かせ、連也自らが仕上げを行ったその鐔は見事な鉄味だったと伝えられている。しかし、狩野探幽と連也の時代は合致せず、おそらく別の絵師が下絵を担当したのだと思われる。また、自らの剣術に合う拵を考案したと言われ、それは柳生拵と呼ばれている。尾張藩には尾張拵と呼ばれるお国拵の形式があり、柳生拵と尾張拵は共通の特徴を持ち(尾張で製作された刀装具を使用する、鞘が小判形でガッシリしている、鞘の鯉口の内側の木部を丸く厚めにしている、柄下地を薄くしている等)、柄の部分に大きな相違がある。柳生拵の柄の特徴として次の内容が挙げられる。

- ・通常の拵と比べて目貫が逆の位置となっている
- ・下地を製作する段階で目貫の下が鋤下げられている
- ・柄の棟方が角張る(通常の柄は円形)。①②④

資料4 柳生拵 柄



資料5 献上拵 柄



資料7 柳生拵 棟方



資料8 献上拵 棟方



文章ではなかなか伝わりづらいものがあるので、実物をもとに柳生拵の特徴を示していきたい。

資料3は大小柳生拵の大刀の写真である。鞘は尾張地方によく見られる菜種塗で、尾張金工として著名な二子山則亮の鉄鐔がついている。

尾張で製作された縁頭は、縁に対して頭が小さく腰が高いという特徴がある。今回の柄の頭は角製で縁金具よりも小さく作られており、献上拵の角頭と比較するとその違いがよく分かる。

目貫の位置を見てみると、献上拵の柄の目貫と比べ逆の位置となっている。柄を握ると右手が上、左手が下になり、通常の柄では指に目貫がかかるようになるが、柳生拵の柄の位置に目貫があると掌のなかに目貫が収まるようになる(資料4・5)。

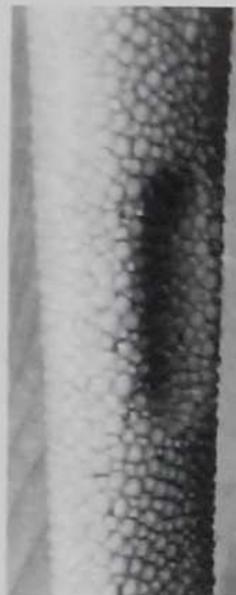
また柳生拵では、柄下地を作る段階で目貫の入る箇所を鋤下げており、通常の柄と比べ、柄巻をした時に目貫が出ないよう工夫されている(資料6)。

棟方を見てみると、献上拵の柄と比べ角張って平らになっており、柄自体も薄く作られている(資料7・8)。

手の内の大切さはあらゆる剣術家、剣道家が口を揃えて語っている。筆者も剣術を少しだけかじった身だが、その短い経験のなかでも色々な方から同様の話を伺っており、連也も自身の剣術の術理を手の内に求め、それに合う柄をとことん追求し、この形に行きついたのではないかと思われる。



資料3 黒菜種塗柳生大小拵



資料6 柳生拵 柄 目貫下の鋤下げ

二、尾張刀工 秦光代

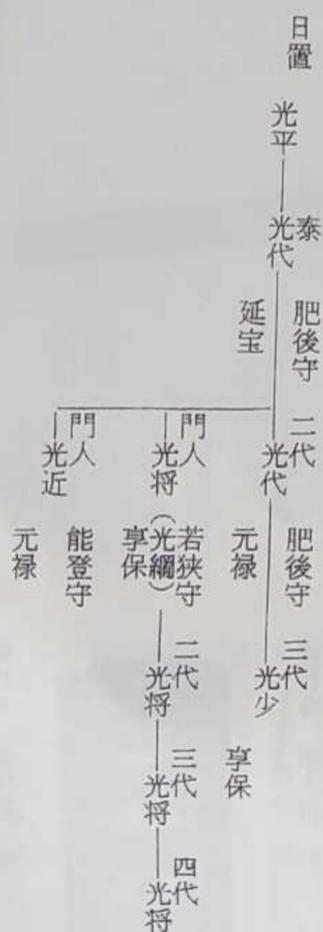
連也が好み、お抱え工として多くの業物を打たせた秦光代とは何者なのだろうか。  
刀剣書等に記載された秦光代についての説明を引用し紹介したい。

光代（延宝）

「肥後守秦光代」「伊藤肥後守秦光代」「伊藤肥後大掾秦光代作之」「尾州住秦光代」「秦光代」「光代」と銘を切る。伊藤姓、本国山城という。美濃関から名古屋に移る。尾張の劍聖、柳生連也殿包の仲介で江戸石堂の伯父、対馬守橘常光の子弟となった（資料9・10）。のち尾張に来て越中守貞幸の養子となったが不縁となって別家する。寛文年間に肥後守を受領した。初め名古屋西鍛冶町（桶屋町筋・蒲焼町の辺り）に住んだ、のち南門前町に移る。柳生連也の抱え鍛冶となってその好みに応じた幾多の名作を残している。  
特に尾張名物「鬼の包丁」は異名のある脇差

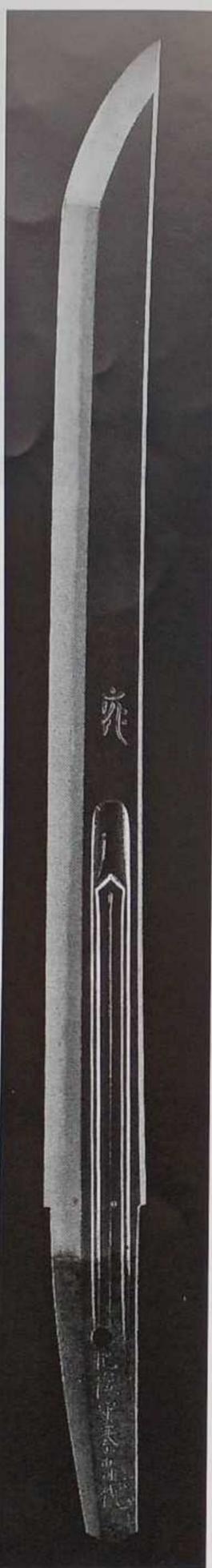
資料9 尾張刀工 石堂常光門 ⑥

1 石堂常光門



光佐  
宝永

資料11 脇差 銘 肥後守秦光代（鬼の包丁）⑩



資料12 脇差 肥後守秦光代（撮影・羽田洋『刀剣画報』）

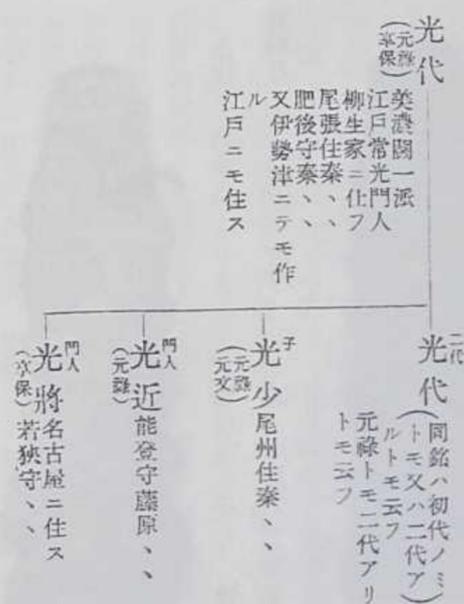


資料12 脇差 肥後守秦光代

長さ55・62センチ（一尺八寸三分六厘）  
反り1・4センチ（四分六厘）  
元幅3・36センチ  
先幅2・2センチ  
先重ね0・8センチ  
切先長さ3・76センチ  
茎長さ14・16センチ  
姿：鑄造、庵棟、身幅広く元先の幅差開き、  
重ね厚く先反り高めにつき中切先。

（表切刃造り）で、身幅広く光代の苦心を重ねた異相の作りこみで、尾張新刀の雄たるに恥じない。また同じく光代作の柳生連也殿包終生の差料は、大刀には「かこつるべ」、小刀には「笹の露」の添名があり、光代の乱れ刃出来中の最上作といふべきものである。⑥  
此工亦本國美濃にして、江戸に出て対馬守常光の門となり、後に尾州に移住す。時代元禄比。作風は之れ亦た稍や関風を存し、總體政常に似たり、又た此作には直刃に逆足をなど入りたるものありて、如何にも上品に出来たるもの往々あり、彫物美なり此作亦た世に少なし。⑦  
秦光代先板二見ヤウクハシ然シ大抵ヨリハ上手也國知ラズト有ハ誤ナリ ⑧  
秦光代、地鉄細かく小鈍、匂あり。直刃、又、中亀文が多い。  
先祖は大和鍛冶、関に来て又、江戸へ下る。光平の門人となり、又勢州桑名、尾州名古屋などに住まう。元禄、寛永、正徳、享保中。⑨

資料10 尾張刀工 光代門 ⑩



現存している刀剣は打刀、脇差が多く、短刀は稀であると聞く。徳川美術館に柳生利延所持銘のある脇差が、熱田神宮には秦光代の短刀が所蔵されている。  
秦光代といえば脇差というイメージが強いが、これは前述した鬼の包丁（資料11）によるものだろう。長さ一尺三寸六分で表切刃造り、身幅が広く重ねが厚い鬼の包丁と呼ばれる脇差は、刀に対して非常に厳しい注文を出していた連也がお抱え工の秦光代に何度も打ち直しをさせて完成した渾身の一振り、連也の屋敷に賊が侵入した際にこの刀を以て一刀両断したという逸話がある。  
ここに秦光代が打った脇差があるので紹介したい。

地：小板目調に板目、柾目交え棟寄り柃に流れ、差表やや肌立ち、ごころを交え地沸細かく厚くつき、処々細かい地景を交え鑑元に白け映り斜めに入りそのまま先に向かつて鑄寄りに淡く白けが立つ。

刃：直刃調に浅いのたれ、僅かに小互の目を交え、処々に小足入り、匂口しまりごころに小沸よくつき匂口明るい。  
帽子：のたれ込んで焼幅を上げ、二重刃ごころを交え、直ぐに丸く短く返る。

彫物：表裏広い棒樋に腰樋、樋先下がる。

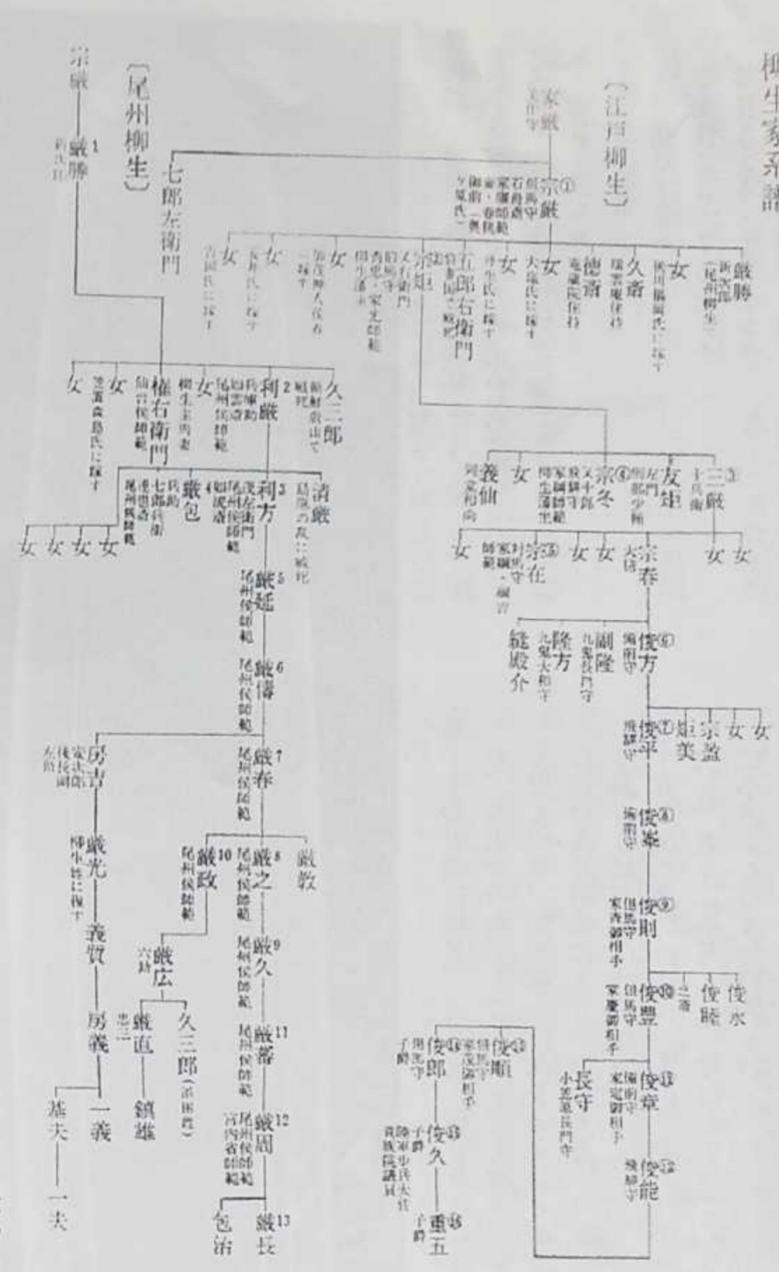
茎：生ぶ、先刃上がり栗尻、鑢目筋違、目釘孔1個、差表孔の下棟寄りに太鑿長銘

（澤田康則氏押形より）

三、柳生光代

これまで柳生連也と秦光代について紹介してきたが、連也が自身の修業の末にたどり着いた日本刀とは一体どのようなものだろうか。その答えの一つがここにある。

資料13 柳生家系譜 ②



資料14 柳生一義 ⑫



これから紹介する日本刀は連也所持と伝わるもので、秦光代に打たせ拵を製作したと伝わっている。尾張柳生家(資料13)の分家に伝来し、台湾に残されていたものを公益財団法人日本美術刀剣保存協会の無鑑査に認定された昭和を代表する名人柄巻師捲山・辻京次郎先生が取り寄せて所持されたと伝わっている。

なぜ連也が所持した日本刀が台湾にあったのだろうか。その鍵を握るのは、柳生一義氏である(資料14)。

柳生一義氏は、幕末の元治元年(1864)に尾張柳生家の分家に生まれ、帝国大学を卒業したのち台湾銀行の頭取を務められた方である。業務遂行のため渡台した一義氏は、長年台湾銀行の事業拡大に奔走するが、仕事で上京した際にご家族の不幸があり、急遽台湾銀行頭取の職を辞任、以後台湾に戻ることはなく、その4年後の大正九年(1920)に病にて没した。⑫

骨董好きで知られていた一義氏は、台湾の自室に多くの骨董品を飾っていたというが、おそらくそれらは辞任後も台湾にそのまま残されており、今回紹介する日本刀もそのうちのひとつであったと考えられる。

尾張名古屋の地に居を構えて柄巻師として活躍されていた辻先生は、日本刀職人談義の中でも取り上げるほど、お国拵である柳生拵に並々ならぬ関心を持たれており、連也が所持した日本刀が台湾にあるということを知り、これは何としても日本に戻さなければならぬとの強い思いを持って取り寄せられたのであろう。

辻先生のご尽力のおかげでこの日本刀は今まで存在しているのであり、それがなければ戦後の動乱のなかで歴史の闇に葬られてしまっていたかもしれない。まさにご英断と言える偉業である。

それではこの日本刀について紹介する。

資料15 柳生光代  
脇差 銘 肥後守秦光代  
長さ45・5センチ(一尺四寸九分八厘)

この秦光代の刀には休め鞘と鐔、柄が付属している(資料16、17)。

こちらについては公益財団法人日本美術刀剣保存協会の無鑑査に認定された柄巻師・坂入眞之先生の本『尾張拵・柳生拵』にも紹介されているので、以下に引用する。

鞘 この刀には休め鞘(尾張で使われていた柄のない白鞘の意)が付属しており、このような鞘書きがある。

(表) 岩間より少しは華と見えにけり 連也日子カ大小刀ノ装ハ此句ノ意ヲトレリト田邊古舟話也

(裏) 柳生光代 連也好鞘添

一 繩同人好宗徳作 一 魚子ノ縁同人好庄兵衛作 一 鐔同人仕込 一

るく冴える。物打ち切り刃中よく沸、沸筋砂流し風になつたり途切れて刃中の働きとなる。尾張物に見られる荒沸あまり目立たず、沸足よく入る。

帽子：のたれ込み三品帽子になり、先中丸に軽く掃き掛け上品に返る。

彫：丸止めの棒樋を彫る。樋先やや下がる。茎：生ぶ、孔一つ。鑓目勝手下がり。先刃上がりの栗尻。

銘：指表茎穴下より鑓筋を中心に表記の六文字、指裏に「以地鉄銷作之」の六文字(おろし鉄の意味)を力強い鑿で切る。出来上々の脇差。鞘に「岩間より少しは華と見えにけ利」柳生光代連也好鞘添 とある。

(杉浦良幸氏押形より)

反り0・95センチ(三分一厘)  
元幅3・31センチ  
先幅2・52センチ  
先重ね0・63センチ  
切先長さ4・51センチ  
茎長さ12・8センチ  
茎反りなし  
茎重ね0・81センチ

造込：鑓造、庵棟、身幅広く重ね厚く、浅い先込みに大切先の手持ちがガツシリした造り込み。江戸時代中期の典型的な造り込み。

地鉄：地沸あまり付かずよく鍛えられた綺麗な地鉄。底に沈んだ微かな地景元の方に表れる。差裏証鍛えがやや強い。

刃文：沸出来の大互の目乱れ。刃縁沸深く明

資料15 脇差 柳生光代(撮影・コレクション情報 以下、資料16・17同様)



資料16 脇差 柳生光代 休め鞘



資料17 右同(拡大)



蜈蚣目貫市原彫祐乗同時作人ノ由後藤光孝鑑定

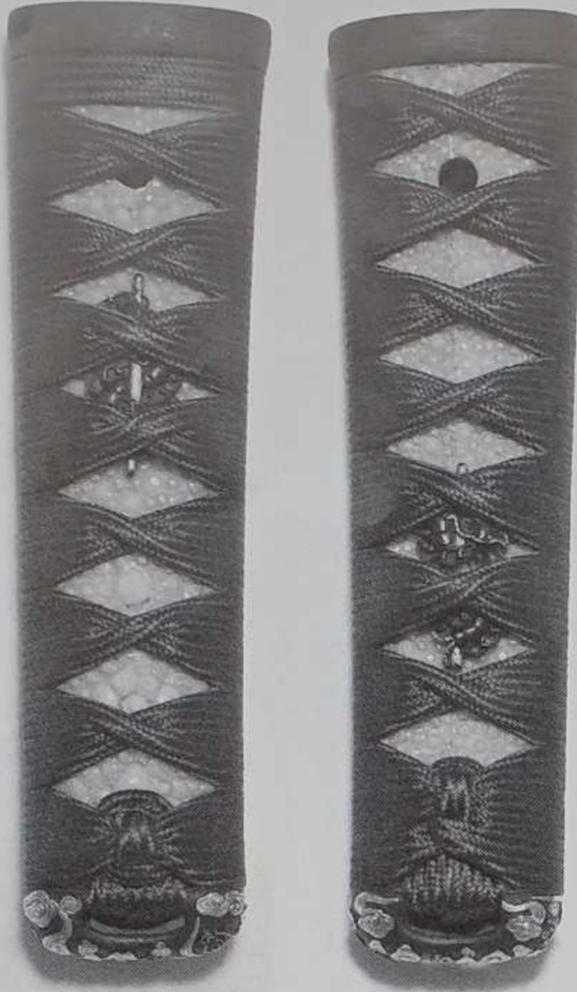
※「連也好鞘添」とあるが拵鞘は失われている(資料17)。

柄 尾張納戸常組糸諸撮み巻き。柄形は刃方一文字でやや立鼓。白鯨二ノ切。柄糸は劣化しており坂入先生によって巻きなおされたが、柄下地は当時のままである(資料18)。

刀装具

(鐺) 丸形角耳小肉の縦二寸三分一厘、横二

資料18 脇差 柳生光代 柄



右同 柄 棟方



資料19 鐺



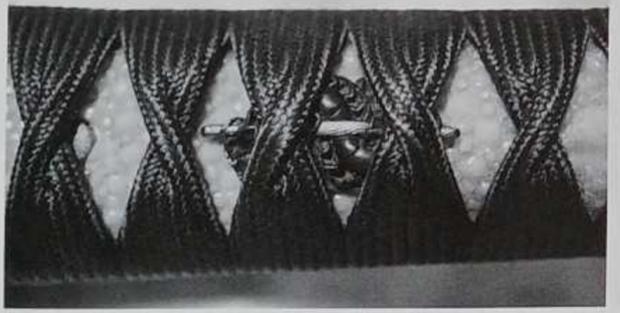
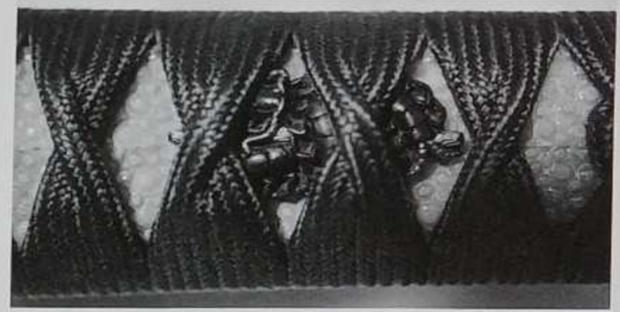
寸二分九厘、厚さ一分六厘の鉄鐺である。鞘書きに同人仕込とあるが、これは連也が自ら製作に関わったということであろう。武人好みの鐺らしくシンプルで強固なものに見えるが、鉄味は抜群である(資料19)。武人が作った鐺といえは宮本武蔵の海鼠鐺が有名であり、こちらもシンプルでいかにも実践に耐えうる姿をしている。

(縁頭) 魚子の縁は鞘書きによると庄兵衛の作という。尾張藩石河家に伝えられた「雕

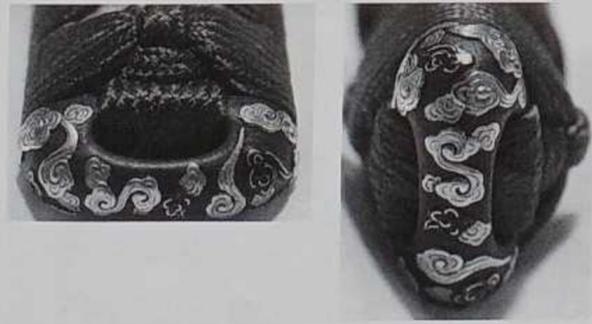
資料20 縁



資料22 目貫



資料21 頭



物目利之傳書」によると金工の大家である後藤家に名を連ねる者で連也に三人扶持で抱えられ尾張にきて彫物をしていたという。豪壮な刀に相応しい4センチを超える大きな縁だがとても丁寧な魚子が打たれており、流石後藤家と言わざるを得ない出来である。頭は鉄地に雲文の象嵌がされたもので、鞘書きに由来はないが尾張物の頭と同じような形をしている。剣術では柄当での技を伝えるものがあり、武器として使用するのであれば鉄地のほうが強度面で信頼できるのかもしれない(資料20・21)。

(目貫) 品の良い蜈蚣目貫が入っており、こちらも「雕物目利之傳書」に記載されている。それによると後藤祐乗と同年代に活躍した有名な金工家である市原の作品であるとされ、鞘書きには市原彫と後藤光孝が鑑定したとある(資料22)。

坂入先生は著作のなかで、この拵は連也時代の拵を窺う数少ない資料であるとして、目貫下の鋤下げ、柄棟の角、柄頭の判型、切羽の厚さ造り込み、鐺の鐺目などに柳生拵の淵源を感じさせると紹介されている。

また、休め鞘に記載されている「岩間より少しは華と見えにけり」という句、鞘書きでは連也の拵に対する思いを意味すると田邊古舟が話したと書かれている。坂入先生はこの句は武人しか理解できないのかもしれないと前置きをされ、「雕物目利之傳書」に図入りで載るほどの名品である蜈蚣目貫市原彫を「華」と比喩したの

ではないかと書かれている。<sup>⑬</sup>  
さて、尾張藩にゆかりのある武人で「たなべ」というと恐らく田辺八左衛門長常の縁者ではないかと思われる。

田辺八左衛門長常は先祖が丹後田辺城の城主であったといわれ、伊東流管槍を学び大坂の陣に豊臣側として参戦、武勇を上げたが終戦とともに浪人となり、その後各藩より誘いを受けるも尾張藩に千石で仕えた武人である。

また、連也の父である柳生兵庫助利敏に入門したと伝えられている。<sup>⑭</sup>

彼が伝えた田辺流の槍術は彼の息子である田辺四郎右衛門常之が尾張藩初代藩主徳川義直に指南して尾張藩の御留流に定められ、二代藩主徳川光友も学んだという。<sup>⑮</sup>

激戦であった大坂の陣で武勇を馳せ、藩主が学び御留流となるほどの流儀を伝え、なおかつ柳生流を学び連也と同門という近い関係にあった彼の縁者であれば連也の句を知っていても何ら不思議ではない。同じ武人同士、彼らには何か通じるものがあったのかもしれない。

また、この句については同様の記載がある鞘書きが現存している。愛知県名古屋市にある徳川美術館に所蔵されている対馬守橋常光の脇差の白鞘である。対馬守橋常光といえは備前伝を得意とする江戸石堂派を代表とする刀工で、日置光平とは兄弟と伝わっている。<sup>⑯</sup>

先述したとおり秦光代は連也の仲介で江戸の橋常光に入門して鍛刀技術を学び、尾張に戻り活躍した。江戸石堂派には秦光代の縁者で秦守

久という刀工がおり、この人は本国美濃で秦光代と同時期に江戸に行つて鍛刀を学び、そのまま江戸に残り活躍したと伝わることから秦光代が江戸石堂に鍛刀技術を学んだことは間違いな

いと思われる。  
連也は光友への剣術指導のため江戸に滞在していたことがあり、その時に橋常光と懇意になり、その縁で光代の弟子入りを仲介したのではないだろうか。そして江戸での経験を経て光代は尾張の地において名を馳せる刀匠になったのである。

では、徳川美術館に所蔵され、「徳川美術館所蔵 刀剣・刀装具」に掲載されている対馬守橋常光の脇差を紹介したい。

脇差 銘 対馬守橋常光

刃長46・7センチ

反り0・8センチ

茎長さ13・8センチ

【姿総観】 鑄造、庵棟、大切先、中反り、身幅広く重ね厚い。

【地鉄】 板目肌証目肌交じり、変わり鉄。

【刃文】 沸深く互の目乱れ、足入る。

【帽子】 乱れ込んで先掃きかけて返る。

【茎】 生ぶ、先浅い入り山形。鑄目筋違い。目釘孔一。表に「対馬守橋常光」と銘がある

(資料23)。  
この脇差は連也が打たせたと伝わっている。

鞘書きには  
「智一ノ二百四 銘有 對馬守橋常光 柳生

連也齋仕込 郷うつし 長サ壹尺五寸四分 鑄元七分半 岩間より少しは華も見へにけり 連也齋曰 刀剣拵装ハ比向意ヲトレリト」という記載がある(資料24)。

これによると連也が橋常光に郷義弘の写しをやらせたことがわかる。実物を拝見したが沸深く互の目が大きく乱れる刃文は郷義弘を思わせる出来で、備前伝を得意としていた橋常光が相州伝の郷義弘の写しをこつとも見事に作るのかと感心させられた。一尺五寸四分の脇差ながらも大切先で身幅が広く重ねが厚いという豪壮な造りから、いかにも武人である連也が好みそうな姿をしている。

そして鞘書きにある「岩間より少しは華も見へにけり 連也齋曰 刀剣拵装ハ比向意ヲトレリト」という記載は前述の柳生光代の鞘書きの内容に酷似している。連也自らが注文して作らせた刀だからこそ拵についての思いをその白鞘に記載したのであろうか。

この橋常光の郷うつしの脇差と柳生光代の脇差、大切先で身幅が広く重ねが厚く、長さは一尺五寸程の脇差であるという共通点があり、連也が橋常光、秦光代に自らが望む刀を打たせたという伝来とまさに合致する二振りではないだろうか。

この姿こそが連也が生涯をかけて追及した末にたどり着いた日本刀なのかもしれない。

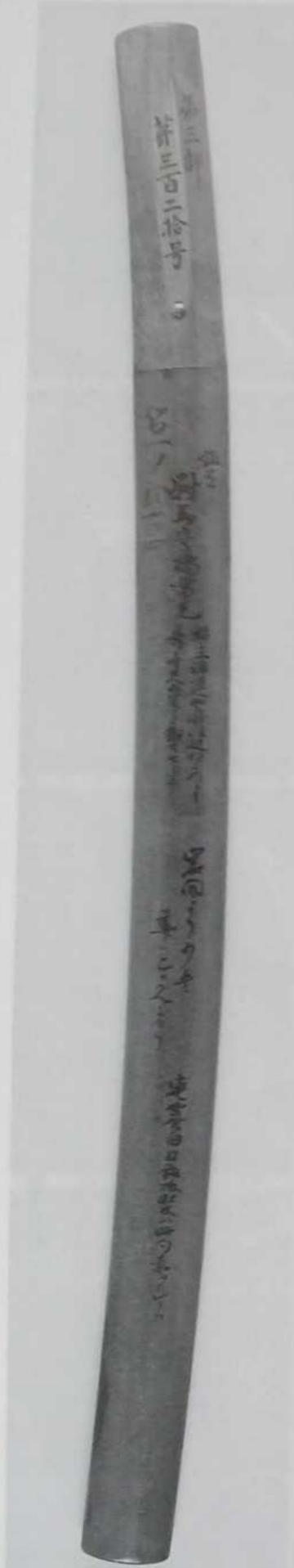
おわりに

柳生連也が好んだ日本刀について実物を参照



資料23 脇差 対馬守常光 (徳川美術館蔵)

資料24 右同 鞘書 (徳川美術館蔵)



しながら説明してきた。

連也が後代に与えた影響は計り知れず、連也が伝えた尾張柳生新陰流の術理は現代にまで受け継がれており、連也愛用の刀として有名な鬼の包丁はその後多くの刀匠によって写しが作られている。

尾張の脇差というと豪壮な姿を思い浮かべる方も多いのではないかと思うが、これはおそらく連也の影響によるところが大きく、尾張藩士達が連也にあやかって豪壮な姿の刀を尾張刀工に打たせたことが一因となっているのではないだろうか。

それと同様に、連也が考案した柳生拵も尾張藩士達を魅了し、あの連也が考案した拵としてあこがれの的となり、現代におけるお国拵の代名詞と言っても過言でないほどの名声を得ることになったのではないか。

連也という当代一の剣術家がその生涯をかけて追及した日本刀は新刀期における一つの答えとして刀剣、刀装の分野に一大ムーブメントを引き起こし、その影響は現代にも及んでいる。

尾張名古屋の地で生まれ育ち、拵製作の一端を担う職人の道に進んだ私自身も連也の偉業ともいえるこの日本刀に魅了されてしまった一人である。

本稿をきっかけに秦光代と柳生連也のこと、尾張刀と柳生拵のことが多くの人に広まり、後世にまで伝えられることを切に願っている。

私の稚拙な文章を読んでくださった皆様、お付き合いくださり本当にありがとうございます。

した。御縁があつて秦光代の御刀を持たせていただくことになり、そこから興味を持ち、どんどん調べていくうちに気が付いたら筆をとっていました。普段は文章とは無縁の世界に生きている自分にとっては悪戦苦闘の日々でしたが、とても新鮮な時間になりました。

刀工一人をとつてもその人生には多くのドラマがあり、彼らが生きた証をその作品から感じることができるとは大変素晴らしいことなのだ。と今回改めて思いました。

今後多くの刀工についての研究が進むことを一刀剣ファンとして楽しみにしております。

また、本稿を執筆するにあたり連也に関する多くの資料を提供してくださった粹陽堂、横地浩紀様、橘常光の脇差資料を提供してくださった徳川美術館様、写真のご協力をいただいた刀剣画報様、株式会社コレクション情報様、押形のご協力をいただいた澤田康則様、杉浦良幸様、柳生光代を残してくれた柄巻師・辻京次郎先生、柳生光代について多くのことをご教授くださった柄巻師・坂入眞之先生、この場をお借りして御礼申し上げます。

誠にありがとうございます。

最後に、今後拵を製作したいという皆様、連也の句である「岩間より少しは華と見えにけ利」の意に従ってみるのはいかがでしょうか。拵にある「華」を見た時、そこには柳生連也と秦光代が生きた江戸時代の風景が広がっているかもしれませぬよ。

# 令和の名刀・名工展 表彰式概要

令和4年8月5日(金)  
於・第一ホテル両国

令和の名刀・名工展は、作刀・研磨・外装技術の発展と人材育成のため公募による展覧会として開催され、5月9日(月)から11日(水)まで出品を受付けました。

出品総数は75点、その内訳は作刀の部32点、刀身彫の部1点、彫金の部8点、研磨の部20点、刀装・拵の部4点、刀装・拵下地の部1点、刀装・鞘塗の部2点、柄前の部6点、白銀の部1点でした。

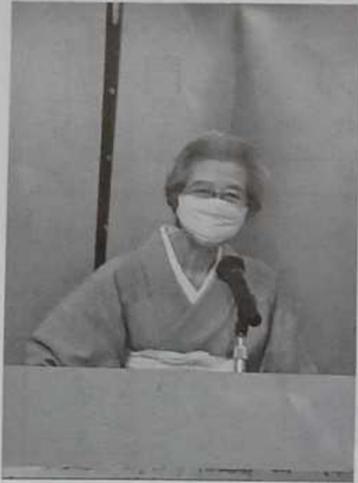
それぞれの部門別審査を、文化庁の担当官立会いのもと、5月18日(水)から3日間、部門毎の審査委員により刀剣博物館講堂で行いました。

審査の結果、全部門を通じての入賞者は24名でした。内訳として大賞は4名、準大賞は9名、入賞は11名でした。また、入選は48名でした。

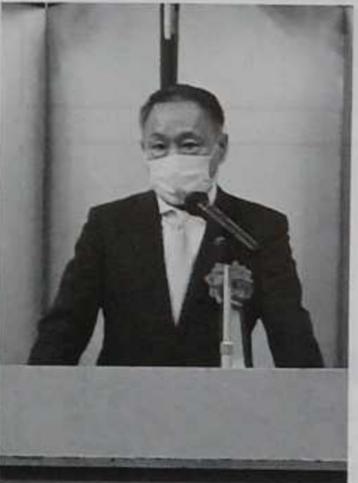
表彰式は令和4年8月5日(金)、第一ホテル両国5階「清澄」を会場として挙行されました。

表彰式には、主催団体役員及び本展各委員会の委員が参列し、経過報告に続いて、運営委員長の渡邊妙子氏から、開催挨拶がありました。

運営委員長  
渡邊妙子氏



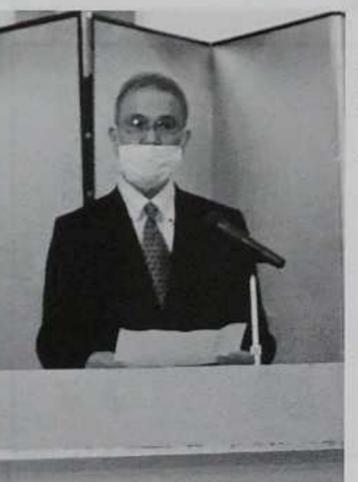
自由民主党参議院議員  
山田宏氏



文化庁文化財鑑査官  
奥健夫氏



作刀の部大賞受賞  
久保善博氏



(写真撮影・宮島進)

## 引用・参考文献

- ①「昔話」近松彦之進茂矩
- ②「史料柳生新陰流」今村嘉雄 上巻三七頁、「連也翁一代記 全」上巻一六八頁、「一七二頁、「昔咄(抄)」下巻三七頁、「三八四頁」 昭和42年 人物往来社
- ③「春の坂道 剣聖柳生展」 昭和46年 春の坂道剣聖柳生展実行委員会
- ④「新編愛知県偉人伝」 昭和9年 愛知県教育会
- ⑤「柳生連也齋」五味康祐 昭和30年 新潮社
- ⑥「尾張刀工譜」岩田與 一四一頁〜一四五頁 昭和59年 名古屋市教育委員会
- ⑦「新刀鍛冶綱領」神津伯 大正9年
- ⑧「新刀銘尽大全」弘化2年
- ⑨「慶長以来 新刀辨疑 現代語訳」 鎌田魚妙 訳・内藤久男 九五頁、三四九頁 平成30年 里文出版
- ⑩「新刀鍛冶工系譜」加用勝男 七一頁 昭和11年
- ⑪「日本刀物語」杉浦良幸 六五頁〜六八頁 平成21年 杉里出版
- ⑫「柳生二義」清水孫秉、大野恭平 大正11年
- ⑬「尾張拵・柳生拵」坂入眞之 七五頁〜八十頁 平成24年 里文出版
- ⑭「武芸流派大事典」綿谷雪、山田忠史編 昭和44年 新人物往来社
- ⑮「日本刀の掟と特徴」本阿彌光遜 三七五頁 昭和30年 美術倶楽部出版部
- ⑯「徳川美術館所蔵 刀剣・刀装具」公益財団法人徳川黎明会 徳川美術館 八九頁、二一五頁 平成30年

(ひらやまなおや 柄巻師)